

令和8年度2学期始業式 校長式辞

おはようございます。2学期がスタートしました。夏季休業を充実させることはできたでしょうか。学習や部活動、その他諸活動での皆さんの頑張りが、2学期に花開くことを期待しています。

この期間中、インターハイ等の上位大会まで勝ち進んだ皆さん、本当によく頑張りました。皆さんのこれまでの努力、そして健闘を称えたいと思います。これを機に部活動を引退した3年生は、もうすでに次の進路実現に向けて努力を続けていると思いますが、部活動での厳しい練習を乗り越えてきた皆さんです。受験勉強に耐えられる精神的・身体的体力・スタミナは備わっていると私は信じています。頑張ってください。

さて、夏季休業中に考えたことがたくさんあるのですが、その中から二点、お話ししたいと思います。

一点目は夏の甲子園です。鹿児島からは神村学園が出場しましたね。3回戦で惜しくも敗退しましたが、私が注目したのは試合後の神村の選手達の行動です。勝利チームの選手達が先にグラウンドを退場する際、神村の選手一人一人が相手チームの選手に、激励の言葉をかけていました。高校の教員をしている私としても、こういう行動こそがスポーツのいいところだな、高校生の持つ純粋さが出ているなと感じながら見ていました。勝敗以上に尊いものを見せてもらえた気分になりました。この様子はテレビやネットの全国ニュースでも取り上げられていましたね。

それから数日たった学校でのことです。児玉教頭先生が私のところに来て次のように言います。「一点、お知らせしたいことがあります。学校近隣に住む方から電話がありまして、、、。」私の経験上、

近隣住民からの電話といえば大半が苦情電話なので、身構えて話を聞き始めたのですが、その内容は簡潔に言うと、「最近、川内高校生がよく挨拶してくれてとても嬉しい」というものでした。

1学期の全校集会で私が挨拶の大切さを話した後、校外においても夕方ウォーキングをしている私に対して挨拶をしてくれる生徒の皆さんが激増しているのは感じていましたが、近隣住民の方々にも皆さんが気持ちのよい挨拶をしてくれているのを知って、この上ない喜びを感じました。皆さんの言動が地域住民の本校に対する見方を変えてくれているからです。

私は、全国ニュースになった神村学園の選手達の行動と等しく、近隣住民に対する皆さんの挨拶は尊いものだと思っています。人に見られていないところとする行動という観点に立てば、皆さんの挨拶のほうが価値があるかもしれない。皆さんは本校の最強の広告塔なのです。学校案内パンフレットなどよりも、皆さんの校内・校外での行動一つ一つが周囲の人たちの本校に対する印象を決定づけるのです。今週末は体育祭で外部の方とすれ違うことも多くあると思いますが、競技以外の部分でも凜とした態度で外部の方と接してほしいと思います。

二点目にお話しするのは、7月28日に発生した熊本地震についてです。地震の影響で自宅が居住不可能になり、避難所や車中泊で避難生活を送っている方がまだ多くいらっしゃいます。校舎の被害がひどく、二学期の始業式を延期した学校もあるようです。高校の教員をしていると、被災地の高校生達は今、どんな生活をしているのだろう、どのように学習しているのだろうと心配になります。このような自然災害のニュースを見聞きするたびに、思い出す出来事をここで紹介します。

2011年3月11日に発生した東日本大震災です。三陸沖を震源と

する巨大地震はその後沿岸部を襲った巨大津波とともに甚大な被害をもたらしました。当時私は鶴丸高校に勤務していましたが、東北各県のライバル校の生徒達が、まともに学習できる状況にないことを知り心を痛めました。家も流され、学校の教室は使用できず、教科書、ノート、辞書、参考書、文房具、すべてを失った絶望感は計り知れないものだったでしょう。我々には義援金を送ることぐらいしかできませんでした。この震災はこれらの高校の翌年度の大学入試結果に少なくない影響を与えるだろうと私は心配していました。

そして、翌年の大学入試です。鶴丸高校は例年と変わらない程度の結果を残しました。まあ、現状維持です。では、東北のライバル校はどうだったか。驚くことに、悪くなるどころか良くなっていたのです。家もない、教室も使えない、勉強道具もないという逆境に直面して、先生と生徒達が工夫に工夫を重ね学習を進めたのです。人間は絶望的な状況に陥り、「もうやるしかない」と覚悟を決めたとき、驚くべき力を発揮するのだとこのとき痛感しました。恵まれた環境で学習していた鶴丸高校生は、劣悪な環境での学習を乗り越えてきた東北の高校生達には完敗だったのです。

さらに翌年、驚くことが起こりました。福岡屈指の公立進学校、修猷館高校が前年度を大きく上回る進学結果を残したのです。その要因の一つと考えられるのが、2年次の修学旅行先の変更です。修猷館高校は修学旅行を東北の被災地訪問に変えていたのです。震災の爪痕がまだ鮮明に残る被災地を目の当たりにして、衝撃を受けるとともに、今自分がいかに恵まれた環境で学習や部活動ができているかを思い知ったといいます。修学旅行を通して修猷館高校生の学びに対する心の軸が定まり、もともと優秀な生徒達がさらに「本気」で学習をしたことで、このような素晴らしい結果が出たのだろうと私は考えています。

これらの話を聞いて皆さんはどう考えますか。お隣、熊本で起こっ

た地震や千葉・石川・富山で発生した豪雨災害の被災者に対して、お悔やみやお見舞いの気持ちを表明する。これはこれで素晴らしいことです。でも、それだけでいいのか。空調の効いた部屋で学習ができる、毎日バランスのとれた食事をし、入浴でき、清潔な衣服を身につけることができる。これを当たり前と考えていませんか。これらのことが当たり前にはできない高校生達が日本国内にいることを想像すれば、今自分が手にしている恵まれた環境をフルに使い切って「本気」で努力することができることを有り難く思うべきなのではないか。皆さんの「本気」がどれくらいなのか、2学期の皆さんの頑張りを期待しています。

以上で始業式式辞といたします。